

佳作

## 父が残してくれたもの

東京都 九段中等教育学校一年 山田 麻央

私はごく普通の家庭で生まれ育ち、少し前まで家族と一緒にいられることは当たり前で、それが変わることはないだろうと思っていた。しかし、中学一年生の時に父を失ってからその考えは変わった。

私は小学五年生から親の勧めで受験勉強を始めたが、なかなか上手く成績が伸びなかった。そしてたくさん時間を塾で過ごすことになり、指示を貰える環境に慣れ、自分の意志は持たず、親に従うだけになってしまった。

中学に入ってからの学校生活も自分のイメージとは違い、全くのんびりとはできない日々だった。そしてその違いからちよっとした不満が少しずつ溜まっていった。更に思春期に入って、私はときどき親と言い争いをするようになった。また、不機嫌な時は人の話をちゃんと聞かず、いい加減に返事をしたり、口数が少なくなったりした。

父が亡くなった日は土曜日で、父や母は仕事で休みで私は半日授業の日だった。私が授業を受けている間に二

人は買い物に行ったり、のんびりしたりすると思うと、少し羨ましい気持ちになった。登校するとき、父はソファでくつろいでいてテレビを見ていたのにも関わらず、私に振り向き、

「いってらっしゃい。」

と言ってくれた。しかし、私はのんびりしていることが羨ましく、振り向かずに、

「いってきます。」

とだけ言って家を出てしまった。もしあと数時間後に父がランニング中に突然倒れ、そのまま亡くなってしまいう会えないと知っていたら、そんな態度は絶対にとらなかつただろう。後から思い返しても自分の行動が本当に信じられないし、恥ずかしいし、憎い。何度後悔しても悔やみ切れない。

父が亡くなった後、母と私は父の知人と話をしたり、父の遺品の整理をしたりした。父のことをよく知っている人達と話をすると、私の知らない父を知ることができた。やんちゃだった子供の頃や野球をずっと続けていて上手だったこと、成績が良かったこと、生徒会長をしていたこと。私にはあまり自分のことを話さなかったけれど、周りの人は、小さい頃も亡くなる直前も頑張り屋さんだと認めてくれていたんだと思った。

そういえば、受験の時は唯一日曜日はいつも家族みんなでゆっくり過ごしていた。父と母はお酒を飲み、みん

な陽気でよく笑っていた。あの楽しかった時間は父の配慮のおかげで、家族のことをたくさん想ってくれていたのだ。

父の遺品の中には、私の知らない私を想ってくれている父の姿があった。私が受験をした学校に提出した書類のコピーでは、私の性格をよく分かっていることが伝わってきて、短所も長所も受け止めて欲しいと書かれてあった。その丁寧な字、文章を眺めると、自分のことをとても応援してくれている姿が目に見えかぶようだった。受験の時、怒られた記憶ばかりだったが、実はとても支えてくれていたと気が付いた。

私が父の遺品の中で特に感動したのは、父の会社の机の引き出しにしまってあった私の手紙である。父はそれを、綺麗にファイリングしてとっておいてくれた。その手紙は、母の作るお弁当に時々サプライズと一緒に入れたものだ。手紙というよりはメモのような簡単なもので、正直そこまで心を込めて書いたものではなかった。しかし、父は大切にしてくれていたのだ。よほど嬉しくなければ、そんな風に大切にしまっておいてはくれないだろう。そのファイリングを見た時、私は泣いてしまった。私は父に会って、謝ると共に感謝を伝えたいと思った。しかし、もう父に会うことはできない。

私は父が亡くなって三年近く経った今でも父のことを思うと悲しくなる。でも同時に父がいなくなったことが

実はピンときていない。海外出張で遠くにいるような気がする時もあるし、全て受け入れ、父のいない生活を送ることに慣れてきたような気がする。いずれにしろ、私には父が残してくれた思い出がある。私は手紙を大切にとって置いてくれたことで、私の知らない所で私について話したり言葉で綴ったりしてくれたことで、父に大切に想われていることを知り、感動した。だから私も周りの人を大切にしたい。人に優しく接することを忘れずに生きていきたい。